

おもいでばろばろ

医歯学系・特任教員 原 田 史 子

こんにちは。歯科矯正学分野の原田と申します。「大学院へ行こう！」というテーマですので、もう何年も前のことになりますが、私の大学院時代の思い出について書いてみたいと思います。

今から10年程前、当時花田晃治教授の下、歯科矯正学分野に入局しました。私は南の国、鹿児島大学の卒業ですが、そもそも、なぜ新潟大学の大学院を選んだのかというと、私は学生時代には、南は熱帯魚のいる海、砂浜には天然砂蒸し温泉、北に行けば霧島山麓のごうごうと湧き出る硫黄泉、そして今や全国区になった芋焼酎を堪能していました。そこで卒後の進路を考えた時、「鹿児島は地元からちょっと遠い（出身は長野県なので）、でもやっぱり海も山もあるところに行きたい。」と思い、矯正科のアクティビティも高いと聞き、新潟大学の大学院を受験しました。

大学院では現、前田歯学部長の率いる口腔解剖学分野で研究することになりました。研究室では、様々な分野の臨床系の先生や留学生が研究していました。他大学出身の私にとって、大学院での縦、横の繋がりはとても嬉しかったです。

夏には、大学院の講義「Writing Academic English」の講師、John先生の別荘へ合宿に行きました。私たち大学院生は、八ヶ岳の一つである編笠岳に登りました。当時のA助教授（現北海道大学教授）も、「僕も登ってみようかな？」ということで、一緒に登りました。途中4合目付近、A先生は大粒の汗をかいて、顔色も悪く完全にバテた状態になりましたが、なんとか励まし合い、全員で山頂から素晴らしい景色を眺め、達成感を味わいました。下山後、前田教授に報告すると「馬鹿だな～。脱落者は見捨てるんだあ～！」と言われました。そ、そんなあ。



齋藤功教授（右）と韓国矯正歯科学会にて

そんな指導方針の前田教授をはじめ、研究面では、教員の先生、先輩方、技術職員の方々にご指導いただきました。実験が大変な時や4年生で追い込まれている時には、精神面でも支えていただきました。同期の存在はお互いに励みになりました。実験は、なかなか思うようには進みませんでしたが、紆余曲折があった分だけ、結果が出た時には嬉しかったものです。また現在に至るまで、齋藤功教授のもと、矯正学分野でお世話になっていますが、形態を観察することや、何か一つでも結果を出してまとめるということは、矯正臨床を行う上でも役立っています。さらに、分野を超えた先生、先輩、後輩との交流は、今でも貴重な、かけがえのないものです。

大学院の4年生の秋には、同期のS君、留学生のNataliaと3人でアメリカはフロリダへ学会発表兼、卒業旅行に行きました。一体、人生で何回、卒業旅行に行けば気が済むのでしょうか。飛行機で空港上空からアメリカの大地が見えてくると、「アメリカ横断ウルトラクイズ」のテーマが頭の中を流れます。私たちは、マイアミでレンタカー

を借り、シュワちゃんの映画に出てくる「7マイルブリッジ」でキーウエストに渡りました。海辺の棧橋で、音楽が流れるなか、沈む夕日をテキーラ片手に見守る人々、とても良いムードです。翌日は、夕方にはフロリダに渡る予定でしたので、キーウエストでの観光時間はあまり多くありませんでした。それにも関わらず、翌日私とNataliaが目覚めたのは、なんとお昼過ぎでした。完全に時差ぼけです。S君は一人で付近を散策していたそうです。前田教授には、S君と私のロマンスのために、何かとご指導（作戦）を賜っていましたが、この旅で二人の破局？（始まってはいませんが）は決定的なものになりました。そんなS先生にも間もなく赤ちゃんが誕生します。お幸せにね。

大学院を卒業し2年後、大学院時代の経験を生かし、大学院生を連れ、アトランタでの国際学会に参加することになりました。乗り継ぎのためシカゴ空港に着くと、再びあのテーマ曲が頭の中を流れます。乗り継ぎ便は50分ほど遅れていて、搭

乗口にはポスターを抱えた人々もいました。私はちょっとお手洗いへ行きました。搭乗口へ戻りしばらく待っていると、搭乗口から制服の女性が出てきて、「ペラペラ、～、ファイナル アナウンスメント。」と言うやいなや、バタン！と分厚い扉を閉めました。「!?…??」、周囲を見ると、いつの間にかポスターを持った人もいません。そして、その扉は二度と開けてもらえず、飛行機が飛び立つのを見送ったのでした。何とか次の飛行機に乗せてもらえ、アトランタ空港に着くと、先に着いていた私たちのスーツケースが広いロビーにぼつんとありました。最終便でなくて本当に良かったです。

そんなこんなで、大学院時代の経験は私にとって、とても有意義なものでした。思い出話ばかりになりましたが、大学院のOBとして、大学院生のお役に立てることがあればと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

大学院の生活について

歯周診断・再建学分野 中川英蔵

興味があればまず入ってみて自分の身で感じる
ことが一番であると思います。

他人の経験はほとんど参考にはなりませんし、
どのようなスケジュールで生活するかも、どんな
結果を残すかも本人次第。「やれることをやれるだ
けやる」という毎日です。

この原稿も単なる一例に過ぎませんが、これま
での体験をお話したいと思います。

ヒトはどこから来てどこへ行くのか。時間を
出来るだけ遡れば起源が解り、それを折り返せば未
来も解るだろうという拙い直感から発生学を選
び、本籍歯周診断・再建学分野、現住所分化再生
制御学分野という形で研究がスタートしました。
初日はご挨拶程度と考えていましたが、椅子に座
るなり教授から「ES細胞から歯を作りたいんで
すよ、あまり時間がないので早速始めましょうか」
ということで直ぐに実験開始。「世界を驚かせよ
う」という目標のもと、それからは24時間365日、
時間も曜日もなく実験漬けでした。

認識の狩人と真理の鉱夫。研究者はその二つに
分けられるような気がします。自分の師事した里
方教授は前者寄りであり、判断・行動のスピード、
仕事への誠実さは驚異的で、常に転換を迫られて
いる状態でした。小さな研究室が大きな研究室に
勝つにはどうしたら良いかということを中心に考
え、考えながら動き、動きながら考えるという毎
日は自分の価値観を大きく揺すり、新たな視座と
引出を増やすきっかけとなりました。そのような
生活から、研究とは、新規性、進歩性、施行可能
性を視野に入れながら、トライ&エラーを可能な
限りのスピードで無限に繰り返すことではないか
と思うようになり、目標も非常識なほど遠く高い
方が良いと感じています。ブレイクスルーの種は



そのような所に転がっているのではないでしょ
うか。

暗闇の中でその周囲が壁なのか扉なのかと叩き
続ける生活は非常に辛いものですが、研究の生活
はそれに似ており、偶然にもネズミ1匹通る程度
の穴からの光を見つけると非常に勇気づけられ、
それが自分なりのセレンディピティーと感
じることがあります。

ES細胞を用いての歯胚再生は想像以上に
ハードルが高く、問題が山積している状態ですが、
一連の実験の中で、生後の口蓋粘膜上皮細胞でも
歯となるシグナルを受け取る能力があることを発
見できたのは幸運でした。今後も臨床応用を意
識して創ることを念頭に、創るための仕組みの解
明にも力を注ぎたいと考えているところです。

新しいことに取り組む時の不安。しつこく付き
纏う不安と共存する心の強さと、不安を解決する
方法の引出を増やすこと、つまりは情念と理知と
のバランスを取りながら地金を磨いて展開力をつ
けるトレーニングが大学院生活の中でできるの
ではないかと思います。但し、目的を持って過ごし
た場合に限りませんが。